２０２４年度

大学院文学研究科博士課程前期２年の課程入学試験

（　冬期・一般選抜　）問題

外国語試験　　日本語

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。

受験記号番号	

成績	

２０２４年度

大学院文学研究科博士課程前期２年の課程入学試験

（冬期・一般選抜） 問題

外国語試験（　　日　本　語　　）

一、次の文章を読んで、後の問に答えよ。

われわれのからだは、そのすべての部分がいつも同じようにはたらいているわけではありません。寝ているとき、座っているとき、しゃべっているとき、歩いているときでは、はたらいている神経も筋肉も同じではない。われわれは(A)刻一刻たえず新しい身の統合をなしとげています。このたえず変化する動的な統合の複雑さには、どのような人工的システムもかなわないでしょう。だがこの現実的な統合が身の統合のすべてではありません。

道を歩いている人のなかには、剣道の達人もあれば、ピアノの上手な人もあるでしょう。道を歩くという現実的な統合の(1)範囲にとどまるかぎり、ふたりの身の統合の構造は似たようなものであり、からだとしては同じだといえるかもしれません。しかしそれがふたりの身の真の姿ではありません。ふたりの身は今は実現していないが、実現しうる潜在的な統合可能性を構造化しています。ひとりの身のうちには、これまでの剣の立ち合い、さらにはこれまでの剣道の歴史、剣禅一致の思想までも肉化しているかもしれない。ピアノを弾く人は、ピアノの鍵盤を身体図式のうちに組みこみ、ピアノ曲の解釈の歴史、演奏法の伝統をも潜在的な身の統合のうちに包みこんでいます。身は解剖学的構造をもった生理的身体であると同時に、文化や歴史をそのうちに沈殿させ、身の構造として構造化した文化的・歴史的身体にほかなりません。A<u>つまり身体は文化を内蔵するのです。</u>

それぱかりではなく、素質のように未来に実現すべき可能的統合もあれば、病者にとっての健康のように回復すべき可能的統合もあります。病や障害は現実的統合としてみれば、それ自体は積極的な統合です。それが異常や欠如とみなされるのは、今は不在である可能的身体（いわゆる健康な身体）との関係において、異常であったり、欠如であったりするにすぎません。「健康」という概念は、時代や社会によって異なります。色弱が問題にならない社会もあれば、聖なる呪術師や巫女が精神異常とされる社会もあるでしょう。身の可能的統合の拡がりは、時代や社会によって変化します。生き身は単なる生理的身体ではなく、そのような潜在的、あるいは可能的な統合を内蔵しています。

この内蔵化の過程というのは、連続的な過程にみえて、実はかなり不連続です。スポーツでも楽器の演奏でも、あるいはもっと抽象的な学習でもよい。試みるたびにうまくなり、理解が進むのは当然として、あるとき突然身の動きが自由になり、頭が晴れる思いをすることがあるのではないでしょうか。あたかもそれまで無かった網目が突然身のうちに張りめぐらされたかのように。経験は身のうちに沈殿し、くりかえしは（能動的な訓練の場合はもちろん、とくに意識することなくくりかえしている場合でも）、自分では気がつかない小さな発見と創造によって、まだ不確定な網目を潜在的に身のうちに(2)ツムぎ出しているのではないでしょうか。

練習は、能動的に身をある方向に整序して、統合を(3)容易にする回路を身のうちに形成する試みです。身体を動かさないイメージ練習や、イメージを積極的に浮かべて練習することが、動きを内蔵する早道であることがあります。これは意識的・能動的な統合です。ところが逆につぎの段階では、イメージが邪魔(じゃま)になります。こんどは動きによってイメージを消し、□の状態に達することが必要になります。場合によっては、練習を休むことによって、上手(うま)くなったり、こつがつかめることさえあります。この場合にはたらいているのは、無意識的・受動的な統合ともいうべきものです。休んでいる間も練習された動きは、(4)徐々に身のうちに沈殿し、動きのネットワークが受動的に構成され、あるとき突然網目がつながるのでしょう。

ところが一たん網目ができあがると、くりかえしはただの反復に(5)陥りがちです。もっとも抵抗のない道がえらばれ、習慣は惰性となるでしょう。しかし惰性的なくりかえしは、あるとき飽和状態になります。われわれは突然惰性的生に飽きていることを発見します。

どんな立派な計画やユートピアにたいしても「否！」という少数者がいるというだけではなく、計画は現実化するにつれて惰性化し、それに飽きた多数者を生み出します。哲学者の故生松敬三氏の巧みな表現を借りれば、「人間は(B)居ても立ってもいられない存在」なのです。人間は座りつづけることもできないし、立ちつづけることもできない。すぐに惰性化する存在でありながら、惰性的でありつづけることもできない。

人間は易(やす)きにつく存在ですから、禁欲の時代のつぎに享楽の時代が来るのはわかりやすい道理です。面白いのは、人間は享楽にも飽きるということです。享楽の時代のつぎに禁欲の時代が来るという不思議さ――同じ状態を永くつづけることができない人間のいたたまれなさは、動かしがたくみえる生き方を転換し、不可避とみえる袋小路を打開する力さえもっています。B これが惰性的＝創造的な習慣的身体の逆説です。

（市川浩『〈身〉の構造 身体論を超えて』〈講談社学術文庫〉による。58～61頁）

問一 傍線部(1)～(5)のカタカナは漢字に改め、漢字はその読みをひらがなで記せ。

(1)　　(2)　　(3)　　(4)　　(5)

問二 二重傍線部(A)「刻一刻」とあるが、「刻一刻」ということばを用いて短文を作文せよ。

受験記号番号

問三　二重傍線部(B)「居ても立ってもいられない」とほぼ同じ意味をもつ語を、本文中から**ひらがな七文字**で抜き出せ。

問四　空欄にあてはまる最も適切な語を次の中から選び、○で囲め。

①　最適　　②　飢餓　　③　悦楽　　④　無心

問五　傍線部A「つまり 身体は文化を内蔵するのです。」とあるが、身体が文化を内蔵するとはどういうことか。「統合」ということばを用いて、本文に即して説明せよ。

問六　傍線部B「これが惰性的＝創造的な習慣的身体の逆説です。」とあるが、惰性的でありながら創造的であると言えるのはなぜか。「逆説」ということばの意味内容に注意しながら、本文に即して説明せよ。

受験記号番号	

二　問一～三に答えよ。

問一　次の文中の空欄（①）～（⑩）に当てはまる平仮名一文字を入れよ。答えは文中の（　）内に直接記入せよ。

音楽（①　　）存在するためには、まずある程度の静かな環境を必要とする。たとえば、鐘もしくはそれに類似する音が鳴り響いているなかで、鐘の音を素材とした音楽を演奏して（②　　）、その音は環境に同化してしまうので、音楽として（③　　）聞こえない。ちょうど、赤い紙（④　　）赤色のクレヨン（⑤　　）絵を画こうとするのと同じである。

しかし、程度を越えた静けさ―真の静寂は、連続性の轟音を聞くのに似て、人間にとっては異常な精神的苦痛（⑥　　）ともなるものである。日常生活のなかでは、このような体験をすることはないが、音響器材の実験用などに使われる無響室に閉じ込められると、音を発してもほとんど百パーセント壁や床や天井に吸収されてしまい、自分の声さえ充分に聞くことができなくなるので、恐怖に近い非常に強い孤独感に襲われ、それに耐えるのは苦痛であり、限度をこすと精神の異常さえきたすという。

また大砂漠のなかで夜（⑦　　）迎えるとき、ときには完全な静寂に支配されるために、自分（⑧　　）その静寂のなかに吸い込まれていくような、ちょうど、無響室に閉じ込められたとき（⑨　　）恐怖に近い感覚（⑩　　）襲われるという。

（赤川也寸志『音楽の基礎』〈岩波新書〉による。1～2頁）

問一　次の文中の空欄（①）～（⑩）に当てはまる日本語表現を直接記入せよ。なお、一箇所ある（③）には同じものが入る。

自然科学の書物を読んでいると、よく数式が出てくる。そこまで苦労して読んできた（①　　）、数式を見ただけでいやになって読み進む意欲を失ってしまう。私自身、その経験があり、書物を投げ出したこともあった。それにたいして先輩は「すぐにあきらめないで、しばらくはその数式についてあれこれと（②　　）みるように」と（③　　）してくれた。「そこが君の脳を発達させるかどうかの（④　　）なんだよ」と。

そう言われてみると、一見むずかしそうな数式もじっと見つめたり、分解したりしているうちに、なんとなく（⑤　　）くることもあった。そうしているうちに気がついたのだが、この先輩の（③　　）は、ふつうの書物を読むときにも十分にあてはまる読み方であった。

一般書を読むときも、むずかしいところに出会ったとき、そこで止めてしまっては、せっかく読みはじめたのにその書物から何も（⑥　　）ことになる。そこで何回もくりかえして読めば、はじめ（⑦　　）ところも自然にわかってくることもある。これについては、昔の人が「読書百遍義自ら見る」と教えている。また、そこでじっくり考えるなり、辞書を（⑧　　）なり、他の人にたずねるなりして、そこの意味の理解につとめれば得るところが大きいことになる。

もう一つの読み方がある。それは「飛ばし読み」（パス読みともいう）である。わからないところに出会うと、そこを飛ばしてその先をどんどん読んでいく読み方である。この方法では、そのときわからなかったところも、あとになって前後関係から自然に（⑨　　）がわかってくることもある。また、そこが重要なところでなかったりすることもある。そのうえ、この方法では読む速度が落ちないから、なによりその本にたいする興味を失うこともない。したがって、飛ばし読みはひじょうに有効な読み方で、ときにより、書物によって読者に（⑩　　）したい方法である。

（高木貞敬『脳を育てる』（岩波書店）による。134～135頁）

三、次の文章を読んで、全体の要旨を二〇〇字以内で記せ。

「私が存在していないこと」がどういう状況かを、いまここに存在している私が、反事実的に想像してみることはできるかもしれない。たとえば、「もし私が存在していなければ、私はこんなひどい苦しみに耐えなくてもよかったことだろう」という反事実的な想像をしてみることはできるかもしれない。そしてその反事実的な状態について、善悪の判断をすることも可能かもしれない。ところが、「私が生まれてこなかったこと」がどういう状況なのかを、いまここに存在している私が、反事実的に想像してみることはできない。なぜなら、「もし私が生まれてこなかったならば」という反事実的な想像を正しく完遂しようとすれば、それはいまここでそれを遂行しようとしている私の存在をも消さなければならなくなるからである。もし私が生まれてこなかったならば、私はいまここにいるはずはないのであり、この問いを考えることすら不可能なはずだからである。「私が生まれてきたこと」の否定を正しく行なおうとすれば、それは私がいまここに存在してこの問いを考えていることにまで実際に波及し、いまここの私を飲み込んで否定してしまわざるを得ない。「私が生まれてきたこと」の反事実的な想像は、それについて判断するべき主体であるいまここの私の存在を実際にこの世から抹消することを要求するのである。そして、もしその否定が正しくなされたならば、私はもはやその事態を想像することができなくなるのである。

「私が存在していないこと」に関しては、このようなことは起きない。それはひとつの反事実的な状態であるから、いまここにいる私はそれをいわば突き放して仮想的に措定し、その状態について判断をすることができる。たとえば、「私が存在していない場合には、私が何かの経験をするということもあり得ないのだから、そのことは善いのか悪いのか」という点について、いま私はここに存在しながらその問いを有意味に考えることができる。ところが「私が生まれてこなかったこと」に関しては、いまここにいる私はそれを突き放して仮想的に措定することはできない。なぜなら、「私が生まれてこなかった場合には」と措定したとたんに、私はいまここにいる私の存在そのものを実際に否定しなくてはならなくなるのであり、この措定を私は有意味に実行することができないからである。静的な存在の次元とは異なり、動的な生成の次元では、私の生成の否定は、それを否定しようとしているいまここの私の生成の否定の完遂にまで及ぶ。この点にこそ、存在と生成の決定的な差異を見なくてはならない。

これを別の角度から考えてみよう。「私が存在していない宇宙」は、反事実的に措定可能である。ところが「私が生まれてこなかった宇宙」は措定可能どころか、そもそも語義矛盾である。もちろん「私が生まれてこなかった宇宙」という文章を私は組み立てることはできるが、それが具体的に何を意味するのかを私は理解することはできないし、それが具体的にどのような状況なのかを想像してその善悪を判断することもできないのである。なぜなら、それを想像するためには、いまここでそれを想像しようとする私それ自体の不在の状況を作り出さなければならないが、それは不可能だからである。つまり、「私が存在していない」状態についての反事実的な想像の場合、いまここでそれを想像している私それ自体にまではその否定の力は及んでこずに、いまここの私は外側の安全地帯に立って命題を傍観的に考察することができるのだが、「私が生まれてこなかった」状態についての反事実的な想像の場合、いまここで

それを想像している私それ自体にまでその否定の力が及んできて、私を飲み込んで消去するということが成立しないといけないからである。私の存在を反事実化することは可能であるが、私の生成を反事実化することは不可能である。私は自身の存在の否定の外側には立てるが、私は自身の生成の否定の外側には立てない。まさにここに「生成」の「生成」たる所以がある。「生成」は力なのである。宇宙が過去に二つの並行宇宙に分岐して、私が存在するようになる宇宙と、私が存在しないまま現在に至る宇宙に分かれたとする。このとき、私は、私が存在するようになる宇宙について想像をすることができるし、私が存在しないまま現在に至る宇宙について反事実的な想像をすることができる。しかしこれに対して、私は私が生まれてこなかった宇宙などというものを想像することはできない。一見すれば、「私が生まれてこなかった宇宙」は「私が存在しないまま現在に至る宇宙」と同じようだが、実はまったく異なる。私は後者を想像することができるが、前者を想像することはできない。前者は後者とけっして同一ではないだけでなく、そもそも想像することすら不可能な何ものかである。想像することすら不可能であるから、その状態についての価値判断は不可能であり、その状態の善悪の判断などそもそもできるはずがない。私の非存在と私の非生成は本質的に異なっており、前者は措定可能であるが後者は措定不可能であるという命題を、「私の非存在／非生成問題」と呼んでおきたい。これは新しく発見された命題である可能性がある。

（森岡正博『生まれてこないほうが良かったのか？　生命の哲学へ！』〈筑摩選書〉による。285～288頁）